

過熟社会における酪農場と草地開発の視点(その3)

一酪農場の未来学、多様化する価値観と現代社会の構造一

篠原 功(酪農学園大学)

先の(その2)では人間生活の観点から21世紀型酪農場に働く人々のシビルミニマム・シビルバランスについて検討し「ランド・マネージメント・モデル」を提案した。

今回は、その「ランド・マネージメント・モデル」と「……………と勤労者のための営農社会環境の整備目標」(その1の試案)を重ね、それを多様化する価値観と現代社会の構造から眺め、さらに水に浮かぶヨットの帆走原理・実技体験から宇宙船地球号における未来の酪農場と草地開発の視点についての一つの異次元思考を試みてみたい……………。

以上の語りは、北草研講演発表会での「演出」で、一般にはこれを整理記述することになるのが常識というものであろう。しかし本稿ではいつも講演の後で「未来への手掛かり」が看えてくるのである。それは、「未来学は未来に有り、現実を超えることはできない」ということなのだろうか。

また現場を歩き考えた。その結果、標記のテーマ「過熟社会に……………」は、著者にとって過大なテーマであったか、と気付いた。そのとき、その重圧に打ち菱がれてしまった。しかし、時が過ぎて「未来は極めて近い処から始まる」という意識に達した。

そこで1991年の今、都市の過密と地方の過疎、高等教育就学適齢期人口ピークのなかで大学受験浪人の続出と、過疎の酪農集落のなかには後10年で60歳未満の人はいなくなる所もめずらしくないという。今こそ、いや、何時の場合でも国民一人ひとりの人生を大切にす施策が望まれる。ここで特に農山漁村の人々と都会人のために理解と調整を要する緊急課題を著者の直感により拾ってみると

- 1) 医療機関から離れた地域に住む人々に対する生活保健環境を改善すること、とくに国立医療機関を地方へ移転させてその任に当てること。
- 2) 教育機関から離れた地域に住む青少年に対する生活教育環境を改善すること、とりわけ酪農村に育ち牛の世話をしてきた青少年や、学習時間がとれず、また学習塾など教育環境に恵まれない勤労青少年にも高等(大学)教育を受ける機会を特別に設けること。
- 3) 地方の自然や農林水産用地を都市の人々と農山漁村の人々の共有の景観・環境財産として保護改善すること。またその施策を通じて地方の所得向上を図ること。

などが挙げられる。

あるとき著者は、有識者から「あなたのは未来学ではなく、願望でしょう」という批判を受け、しかし、と、すねて、後に、批判こそ自由社会の証ではないか、と喜んだ。

文明は人間社会を運営する装置であり、文化はその装置を人間が用いて生産した精神的価値である。未来は、その社会を担う人々の持つ価値観によって造られるといわれている。未来は無数の可能性を持っており、一人ひとりに願望と未来があり、それは時々刻々多様に変化している。したがって、過熟社会における酪農場と草地開発の視点も時々刻々と多様に変化する。

すなわち、文明(しかけ)と文化(よるこび)の吟味を伴いながら、例えば、ある酪農場の今日やらね

ばならないことの一つは、牛舎からほどよいところにシャワーを設け、跡継ぎ息子や娘夫婦のために社会資本の充実した市街地の公営住宅を借りて、両親の住む酪農場へ通勤するようにすることかもしれない。このような試行錯誤が若者に酪農場の素晴らしさを再発見させ、壮年者もまた新しい価値観を得るであろう。そして、そこに、その「時」と「場」にふさわしいミルクングパーラと週休二日の草地酪農場が形成されるであろう。